〈青森県史〉の窓 91

江戸藩邸
―気苦労多き江戸暮らし―

石塚雄士
（県民生活文化課 県史編さんグループ）

徳川将軍のお膝元である江戸、すなわち現在の東京に存在していた、青森県に関係する藩の江戸藩邸については、これまでも何度か紹介されてきたところである。

各藩のもっとも代表的な藩邸である上屋敷の位置をここで確認しておく。

盛岡藩は現在の日比谷公会堂付近にあたる外桜田、八戸藩は港区六本木一丁目にあたる麻布市兵衛町、そして弘前藩と黒石藩は墨田区内にあたる本所二ツ目と本所三ツ目通にそれぞれ屋敷を構えていた。

津軽稲荷神社（弘前藩中屋敷跡　東京都墨田区所在）

さて、藩主がそれぞれの国元でもっとも地位が高い存在であることはいうまでもない。しかし、参勤交代で江戸に上れば、そこには全国から集まった藩主たちがひしめき合っていたのである。さらに江戸城の中では、数千人の家臣を持ち、数十万石の領地を治める大大名といえども家臣たちと引き離され、徳川将軍の家臣の一人として振る舞うことが求められたのである。

こうした状況の中では、幕府に対する失態や同輩である他の大名たちとのトラブルは、「忠臣蔵」で有名になった赤穂藩主、浅野内匠頭の一件からもうかがえるように、藩の存続すら脅かすものであった。加えて、江戸において武士としての体面を失うような事態を生じさせた場合、全国的に名誉が失墜する恐れすらあったのである。

そのため大名たちは、幕府や他家とトラブルを起こしたり、自ら失態を演じたりしないよう、江戸ではとくに注意を払う必要があった。

例えば、江戸城で行われる儀式等の前には、見取図で自らが座る位置や動線を確認するとともに、同僚の大名たちと、儀式の段取りや口上、献上物などについての入念な打合せや予行演習が繰り返されていた。さらに、幕府との様々な交渉において相談に乗ってもらうため、幕府の要職と私的な関係を結ぶのはもちろんのこと、江戸城内での便宜を図ってもらうため、城内の世話役である「坊主」という役人とのつながりも確保しておくなど、陰に日向に不断の努力が続けられていたのである。

また、このような注意が家臣たちにも徹底されるべきものであったことは、江戸詰の家臣を対象とした数々の法令からもうかがい知ることができる。

法令には、多くの大名と諸藩の藩士が集まる江戸において、他の大名家等との無用な摩擦が生ずることを避けるため、行列同士が路上で行き合った時の対処や、主君の供で出かけた際の心構えについて実に細々と規定されている。

そして、大都会江戸での生活に浮かれる藩士の気持ちを引き締めるためか、武士としての品格が疑われるような行為、例えば路上での放歌高吟や寄り道、買食いなどをすることは厳に慎むように規定され、常々行儀よく振舞うことが要求されていた。

こうしてみると、藩主にとっても藩士たちにとっても、江戸での生活は華やかで楽しいものであった反面、様々なつきあいの中で常に体面等を保つ努力が求められ、行動に気を遣わねばならないとすれば、色々と気苦労も多かったのではないだろうか。